
リバー・デリバー

B-POP

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リバー・デリバー

【Nコード】

N9839X

【作者名】

B・POP

【あらすじ】

世界樹。物理法則を超えるほどの生産性を持つ巨木。

その恩恵を受けて辛うじて生き長らえ、申し訳程度に栄えている世界。しかしそれは、一步世界樹のもとを離れば人の生きてはいけない荒野が広がっていることも意味していた。

そんな世界でバイク一つで配達業を営む男がいた。名前はリバー・D。

バイクと体一つで荒野を駆ける配達屋の前に現れたのは、自分自身を「配達」してくれと依頼する奇妙な少女だった……

プロローグ

西に傾き始めた太陽が、もう休めばいいのに最後の一仕事と言わんばかりにジリジリと地面を焼き、地平線に近い場所の景色は陽炎でぐにやぐにやに歪んでいる。が、そんなものよりもずっと前から目に入る汗のせいで世界の半分は歪んで見えていた。

一応は安全第一をうたっているのに、逆光の中ではアクセルスロットルを若干緩めて速度を落とすようにしている。

エンジン音が少しだけおとなしくなり、それに反応するように周囲を流れる風の音やタイヤが砂利をかむ音がつきりと聞こえるようになった。すぐ隣では荷物を満載した側車がゴトゴトと、荒れた路面に揺れている。

元々はただの二輪車だったものに後から側車をつけただけのお手製サイドカーであるせいか、ちょっと荒れた場所ではもろに路面の影響を受けてしまう。かといって新車のサイドカーなど買う余裕もなければそんなものがこの世に存在するのかわかどうかさえ危ぶまれる。そんなものを買ったところで、この世界に荒れていない路面など数えるほどしかないのだから無意味と言えば無意味だが。

「ま、爆弾じゃないからだいじょぶだろ」
ハンドルを握る男がちらりと側車に目をやると、あまりの乗り心地に文句をたれるように、荷物がゴトリと大きく揺れた。

ところどころひび割れた荒野の真ん中を、西日を照り返しながら一台のサイドカーが走りぬけてゆく。ぺんぺん草も生えないような荒地ではあるが、いくらかのわだちが同じ方向に向かって伸びているので、そこが道であることが何とか判別できる。これが砂嵐の後や雨の後ならきつと迷子になること請け合いだ。

「あゝ、ケツが痛てえ」

短い黒髪を逆立てた髪型と頑丈さが取り柄のようなブーツが特徴的な男は、砂漠の中に影だけが落ちこちてきたような真つ黒な外套

をはためかせながら、その中で尻を細かく動かしながら痛みをこまかしている。

文句をたれながら男はゆっくりアクセルを開けてゆく。サイドミラーに映るのは背後の景色よりも自分のタイヤが巻き上げる砂ぼこりばかりで、目の前は地平線で真つすぐに隔てられた黄色い空と茶色い地面だけだ。あまりにも見慣れすぎた景色の中をサイドカーが速度を上げて駆け抜けてゆく。

もう一度、側車の荷物がゴトリと揺れる。

「うるせえ、明日までの辛抱だ」

このままの調子でいけば明日には街に辿りつくはずだ。そうすれば受取人にこの荷物を引き渡し、代わりに報酬を受け取ることができ

きる
それがこの男の仕事だった。

『配達屋』リバー・D。それが男の名前だった。

「しかし、このご時世に奇特な仕事もあったもんだ」

受け取りにサインを書きながら、たつぷりとあごにひげを蓄えた雑貨屋の店主が皮肉と贅辞を込めた声で言う。

「体一つでできる商売にしちゃ楽なほうだと思っただけですけどね」サインを確認し、側車から引つ張り出してきた段ボール箱を男の足元に、できるだけ音をたてないようにゆっくりと置く。さすがに道中で散々ゴトゴトと衝撃を与えてきたとは言えないので、こんなときだけでも荷物を慎重にというのが、実は小さなことだが重要な下手をすると、ここでの荷物の扱い一つで仕事をご破算になることもあるのだ。

「人の財産でもかっぱいで暮らそう、なんて輩がいるご時世に人の荷物をちゃんと届けるってんだから、奇特だろう」

「だから成り立つんですよ。隙間産業、って言うんですかね？」

確かにこのご時世だ。すきあらば他人を出しぬき、自分だけがうまい汁を吸わなければ生きていけないこの世界の環境の中で、多く

は搾取される側に回るか、徒党を組んで身を寄せ合うか、さもなければ荒野を徘徊する無法者になり下がる。そうでもしなければこの荒地ばかりの世の中では生きていけない。

「俺にはできないな、幾つ命があっても足りないだろうからな」

事実、リバーもこの商売を始めてから襲撃を受けたことなんて数えだせばきりが無いし、駆け出しのころはうつかり荷物を盗まれてしまつて途方に暮れた、なんてこともなかったわけではない。おかげでいまでも敷居をまたげない街がいくつかはある。

「いいねえ、若いつてのは。ほら、チップだと思つて食つてくれ」
棚に手を伸ばすと、店主は無造作にそこにあつたものを放つてよこす。

放物線を描くそれをなんとなく鼻先で受け止め、じつと眼玉を寄せてそれを見てみると、

「いいんすか？ コンビーフの缶詰なんて売れ筋でしょ？」

「ま、今後もよろしくつてことだ」

段ボールの中身を確認しながら、店主はニカリと笑つ。けつして器用な笑みではないが、この笑顔で幾多の危機を乗り越えてきたのだらうと思わせる、商売人らしい顔だつた。

「んじゃ、近所の宅配から地球の裏側への配達まで、ご贖員に」

反対に、こちらが浮かべたのはお世辞にも笑顔とは言えないような代物だつた。表現するなら「不器用」の一言に尽きる笑顔は、乳幼児に見せればトラウマになること請け合いだ。

「はは、あんたは腕と器量はよさそうだけど笑つのはやめたほうがいいな」

痛いところを突かれたと思う。自分ではいつもうまく笑おうとしているのだが、気持ちばかりが空回りする。

苦笑いのような笑みを口元に浮かべ、少しひきつった目元で店主に別れを告げて店を後にする。

開け放たれた扉の中で小さくなるリバーの背中を見ながら、もう一度こぼす。

「ありや商売に向かないな」

とりあえずは今回の料金で数日なら食べるには困らないが、荷物が生活雑貨だったこととさほどの量ではなかったので決して収入としては大きくはなかった。

「今回も安宿は確定だな」

とは言いながら、ここ数日は寝袋ばかりの生活だったので久々の布団は楽しみだったし、それ以外にも楽しみはいくつもあった。

基本的に配達は、荒野の中に点々と存在する街から街へ移動しての仕事になる。その時間は短くても数日、長い時で半月からの移動になるのだが、もちろんその間は保存食と野宿を中心とした生活になる。計画を立てる段階で食料の配分や立ち寄る町までの距離を見誤って餓死寸前で命を拾ったことも一度や二度ではない。

というわけで、一仕事終わって羽を広げる街と言うのは、配達家業のリバーにとってはこの上ない安息であり、楽しみでもあった。

できるだけ安そうな宿の前にバイクを止め、閑古鳥が鳴いているフロントでベルを鳴らす。

まだチェクインには早い時間なのか、照明の落とされた薄暗がりの中を吸い込まれるようにベルの音が消えてゆく。

太陽が手加減なしに照りつける表通りとはちがい、ひんやりとした冷気がむき出しの首筋や二の腕にからみついてくるのが気持ち良かった。おそらくは薄暗い雰囲気のおかげで実際の気温以上にそう感じているのだろうかどちらでもよかった。

「はいよ、お待たせ」

掃除でもしていたのだろう、頭を三角巾で覆った女がフロント横の階段を下りて現れた。

おかみ、という言葉がこれほどしっくりくる人材も珍しいと思うほどに見事なはまり役で、頭の三角巾も首からぶら下がったエプロンも、その中の隠しきれないふくよかな体型も、全てがこの人物こそが宿の主人であることを物語っていた。

「一人かい？ 生憎だけどうちは見ての通りの安宿でね、ぜいたくなひと時をご所望なら他をあたってもらうほうがいいよ」

男相手に一步も引かないどころか、押し強いその気風はさすがに一国一城の主といった貫禄だ。

「いや、仕事で来てるだけだから、泊まれりや何でも」

提示された料金は納得の安値。さつそく宿帳を記入して前金の宿泊費を支払うことにしたりバーは、ふと思いついたように背後を振り返る。

つられて表を覗き込んだおかみは、リバーの視線の意味を察して視線をぐるりと回す。

「すぐ隣にスペースがあるからそこにおいときゃいいよ。金は取らない代わりに盗まれてもうちは責任を取らない、ってことでいいならだけどね」

もちろん断る理由はなかった。

バイクとはいえ置き場所に苦慮することもあれば足元を見る宿であれば駐車料金などという名目で別料金を請求するところまである。もとより盗難に関しては自己責任であるのが世の常だと考えれば、置き場所を確保できただけでも十分だった。

「ここは酒も出すのか？」

同じフロアにはフロントのほかにカウンターがあり、丸テーブルがそれを取り囲むようにして十セットほど並べられている。もちろん、カウンターの内側には個人で飲むには多すぎる酒の瓶が並んでいるので、バーか何かをやっているのは明白だったが、とりあえずはそう聞いてみる。

「まあね。簡単な料理なら出すし、もし外で食べるとこ探すのが面倒なら使っちゃってもらえとうれしいねえ」

商売つ気のない口調ではあるものの、おかみの自信たっぷりな表情からそれなりに繁盛している店なのだろうことが想像できた。

「覚えとくよ」

「営業は日付が変わるまで、宿もそれと同じだから遅くなりすぎた

ら外で寝てもらうことになるよ」

おそらくこれはジョークだろうがこのおかみの場合は本当にそれを実行しかねない迫力があつたので、とりあえずは曖昧に返事をし、鍵を受け取った。

一階はフロントとバーだけで占められているらしく、宿泊客は二階と三階に泊まるようになっていたようだった。鍵に付けられたタグを頼りに部屋を探し、荷物を放り込むべく扉を開ける。とりあえず何をするにしても身軽になっておきたかった。

部屋はシンプルなベッドとテーブルがあるだけのものだったが、値段の割には掃除の行き届いた清潔な部屋だと感じた。錠戸を押し明けると南向きの窓からは日が差し込み、街の喧騒が室内に流れ込んできた。

「へえ、悪くないな」

そう思ったのは部屋の清潔さもさることながら、窓からの眺めだった。

南向きの明るい景色は街の景色に彩りを添えているようで、街そのものが活気にあふれているように見えた。そして何より、部屋には昼間だというのに電気の明かりがつけられていた。

「そうか、この街には世界樹があるのか」

同心円状に区画整備されたこの街の中央には、街のどこにいても拝むことのできる巨大な木が一本生えていた。

街を一步出れば殺風景な荒野しかないのとは正反対に、その木は空を覆うように枝を伸ばし緑の葉を茂らせ、みずみずしい幹は力強く根を張って、そびえ立っていた。

世界樹と呼ばれるその木は、砂と石ころだけのこの星に両手で数えるほどだけ存在している、しかしその名が示すとおりはその周囲にはひとつの世界が構築されるほどに潤いと恵みを与える、まさに命の木といった存在だった。

その葉は鳥をはじめとする命を育み、枯れ落ちては大地を育み、水を生み蓄える。もちろんそれは、生物界におけるライフサイクル

のすべてを担っているといっても過言ではない、まさに一つの世界だった。

「だったら、この町が潤ってるのも納得だな」

それ以上に、世界樹は人類にとつてのブラックボックスだった。無から有を生み出すがごとくその成長に際限はなく、世界樹の周囲には物理法則を超えて生産された鉱物資源や水、果ては微生物までもが満ち溢れている。何よりも世界樹を世界樹たらしめているのはその「実」の存在だった。

時期を問わず一年中収穫が可能なその実の大きさは、小さな物でも子供の頭ほどで、大きなものでは大人でも抱えて歩くのがやつとの大きさにまでなる。熟れると血のように真っ赤に染まるそれを、その存在の重要性も含めて「太陽の実」と呼ぶものもいる。

決して食用に適さないその実は、古代には他のすべてが使える世界樹にあつて唯一使えないものとして地に打ち捨てられ、養分として世界樹に返されるだけだった。その存在意義が大きく転換したのは、人が科学技術の発展とともにエネルギー革命を迎えた頃だった。ありとあらゆる化石資源が採掘され、より効率のいいエネルギーを求めていた人類は偶然にもその実の持つポテンシャルに気がつくことができたのだという。最初は直接その実を燃焼させたときの熱量に驚き、次にはそこから抽出される燃料の効率の良さに石油で生計を立てていた王国都市が傾くのではないかと噂されたほどだった。ただ、そうならなかったのは、エネルギーとしてはブラックボックスの部分が多すぎた。

世界樹の実を利用した実験の最中に、街が一つ消し飛んだ。あの何があるうと決して朽ちることがないときえいわれていた世界樹の一本を巻き込んで、消滅したというニュースは全世界に嵐のように広がり、疫病のように人の心に影を落とした。

なぜそうなるのかはわからないが便利なので使っている、それが今の人類と世界樹の実の距離感だ。

こうして、個人的に利用するのは化石燃料を、大規模な事業で用

いるには世界樹の実を、という今の世界の構図が出来上がったのだという。それがこの五十年ほどの出来事だというのだから、いかに人間と言うのは砂上の楼閣をさまよっている生き物であるかがうかがい知れる話だ、とは、リバーが学者に古ぼけた本を届けた時に聞かされた話しの受け売りだ。

というわけで、エネルギー資源が豊富な街だからこそその恩恵が安宿のくせに昼間からつけられている電燈と言うわけだ。ほかの、世界樹を持たない街では決して考えられないぜ이었다。ともすれば、夜になれば宿のおやじが明かりを消すように言って回るような街だつて珍しくはない。

「つてことは、食うもんもうまいはずだ。ラッキー」

鎧戸は明けたままで荷物をベッドに放り投げ、財布とバイクのキーだけをポケットに詰め込んでそうそうに部屋を後にした。

さすがに街の中をバイクで走り回るにはサイドカーはかさばるし、何より街の中心部ともなれば店に入るにしても何にしてもおいそれと置いておける場所もないかもしれない。もっと大きな町なら車や鉄道が街の中を走っているような場所もあるが、そんなものはごく一部の限られた町だけの話だ。世界の標準は舗装もろくにされていないような狭い道に人があふれかえっているゴミゴミとした街並みだ。

しっかりと居を構えた商店から粗末なテントに莫産を敷いただけの露店まで、大小さまざまな物売りが所狭しと世界樹を中心とした広場に群がっている。世界樹のある街にはよくある光景だったが、この街の光景は他のそれと比べても活気にあふれているような気がした。

「何か、祭りでもあるのか？」

小腹がすいたので手近な露店で果物を物色し、真っ赤に色づいたリンゴを一つ買いがてら店番の男に聞いてみた。男とは言ってもリバーよりもいくらか年下で、まだ少年といって差し支えないだろう。青臭さの抜けきらない顔立ち、周りの大人に出し抜かれないよう

にとでも思っているのか、終始緊張しっぱなしだ。

「いえ、ここはいつもこんなですよ。この街は世界樹の実の独占を許さずに街全体で管理することで誰もが平等にその恩恵を受けられるんです。その噂を聞いてか、自然と人が集まってるんですよ」

よどみのない言葉は少年の容姿や口調には不似合いで、おそらくは誰かの受け売りなのだろうということが推察できたが、逆にそれなら納得もできた。

「珍しいな、大体は金持ちか王だの貴族だのが独り占めしてて住民は不満たらたら、つてのが常套なものにな」

買ったばかりのリンゴにかぶりつくと、そのみずみずしさに驚くばかりだった。「シャリッ」という小気味の良い音も新鮮なリンゴならではの。世界樹の近くでは、その恩恵を受けてありとあらゆる作物が高品質にできあがる。その代表格が果物であり、一度世界樹近くの果物を食べてしまうと他のは食べられないとまで言われるほどだ。

そのことは間違いなく真実だとリバーも思っている。

溢れるほどの果汁はどこまでも食欲を誘う旨さで、りんごはあつという間に半分がなくなってしまう。

「昔はそうだったらしいんですが、三年前に起こった暴動でそうならたらしいです」

世界樹をめぐる暴動は決して珍しくはなかった。むしろ今発生している戦争の八割は世界樹の利権がらみだと言ってさえ嘘がないほどだ。

「ふうん」

大して珍しくもない話だと思いつながらリバーはあっさりと露店の前から立ち去る。

言われてみれば、確かに人通りも多いし活気もあるが、祭りなどのイベントごとにしては花がないというのが改めて実感できる。祭りが非日常の体現であるとすれば、今ここにあるのはせいぜいが日常の延長線と言ったところだ。

それもそれで悪くはないと思う。

どの町に行っても必ず見られる食料品の店から、一体何を商っているのかわからない雑貨商店、占いをやっているのだと思いき怪しい身なりの老人までが通りにひしめき合っている。そして、そのほとんどが商品を山と扱っているか、常に客を抱えている。

残りの半分のリンゴにかぶりつくと再び口の中に甘い果汁が充満し、みずみずしい旨みが頭のとっぺんから足の先まで行き渡るように感じた。

「よし、しばらくはここに居ついてみるか」

そう思ったのはもちろんリンゴの味だけではない。これだけ人がいて活気があつて物が溢れているということは、取りも直さず物が動き、人が動き、金が動くということだ。もちろんそこには、物や人や金を動かす手段が必要になっているはずで、リバーにとってはほかならぬ飯の種だ。

希望的観測ではあるものの、これだけ人がいれば他の町や地方から来ている人間も少なくないだろうし、何よりもこのまひにあるものがすべてこの街の中だけで消費されるということは事実上ありえない。そうなれば、根無し草のリバーにとっては願ったりかなったりというわけで、

「とりあえずは情報収集からだな。と、その前に」

ぴたりと足を止め、後ろを歩いていた初老の男に嫌そうな顔をされるがさらりとそんなものはスルーし、九十度回れ右をしてすぐそばに会った定食屋に飛び込んだ。

「まずは腹ごしらえだ」

立ち込める調味料の香りと熱気と調理場のどなり声のようなやり取りが、ぺこぺこだった胃を締め上げるように刺激してくる。最後に食べたまともな温かい食事ももう思い出せないほどだったリバーの口の中はすでに唾液が洪水になっている。

厨房でひととき大きな炎が上がり、鍋の中を野菜と肉が躍っているのが見えた。

その男、昼行燈

結局、チャーハンに青椒肉絲だけでは飽き足らず、帰りの露店で焼き立てパンを購入してかじりながら街を歩いたが、さすがに数時間ぶらついただけでおいしい仕事にありつけるはずもなく、収穫がないままに夕暮れを迎えた。ただ一つ収穫だったのは、行商のようなことをしている若い男から、この街には街の中だけで荷物の配達や郵便物の集配を請け負うやつがいるということだった。うまくすれば、街の外に運び出す荷物にありつけるかもしれないとおもったが、そろそろ店じまいをする商店が多くなり始めた時間でもあるため、日を改めることにした。

すでにバーとしての営業が始まっていた宿に帰ると、昼間は見かけなかった男がバーカウンターの向こうでビールサーバーを操作していた。本人がビアダルのような体形をしているが、手先は意外と繊細に動き、見事な手際でふわりとした泡でジョッキにふたをしていた。

昼間のおかみの言葉通りに、店は早い時間だというのにそこそこの繁盛を見せ、テーブルは七割ほどが埋まっていた。

「はいおかえり。どうする、このまま食べてく？」

近くのテーブルに料理を出しながら、昼間のおかみが額に玉の汗を浮かべている。どうやら酒は親父が、料理はおかみが担当するようだ。

「いや、食べてきたから今はいい」

「そうかい。じゃあ呑んでくんだね」

そう言ったかと思うと、次の瞬間には後ろのカウンターに目配せをし、それを受けた初老の男が琥珀色の液体を背の低いグラスに注いでいる。

苦笑いを浮かべるしかないリバーに女将は得意げに笑い、瞬く間に次のテーブルに、半ば強引ともいえるオーダーを取りに行ってい

る。体型に似合ったバイタリテイではあったが、それが嫌味に見えないのはもしかしたらある種の才能なのかもしれない。

そんなことを思いながらリバーは手近な椅子に腰かけ、ぐるりと周囲を見回した。入口の向こうからは、仕事上がりの陽気な話声やそれを狙った呼び込みのにぎやかさが、遠い記憶の中の音のようにぼんやりと響いてくる。

薄っすらと汚れたガラス窓から見えるのはオレンジ色に染まった街と、少し浮足立った喧騒に彩られた往来、そして夕日を浴びて昼間とは全く違う色彩をはなつ世界樹のシルエツトだった。ただ、世界樹に限っては夕陽のオレンジだけではなく、その実が放つ淡い光が陽光のオレンジや影の黒の中に赤く、花のように咲いている。空にまだ星はなかったが、東のほうからは濃紺色をした夜の空気が一呼吸ごとに街を覆い始めていた。

「はいよ、お代は帰りにね」

つまり、ここに居る間はうちで飲み食いをしてくれよ、ということだろう。

曖昧に苦笑いを浮かべたりバーは、運ばれてきた琥珀色の液体に目をやると、薄暗い照明を反射してゆらゆらと金属のように輝きながらリバー自身の目を映し出していた。

とろりとした液体はその純度を現しており、それが相当の強さであることを物語っていると同時に、水で薄めていないことを証明しているようでもあった。

口に流し込むと、久しぶりのアルコールの感触に舌やのどがひりつくほどだったが、あつという間それは心地よい苦味に姿を変え、気がつけばすでにグラスの半分ほどが胃の中に消えていた。

それからの一時間ほどは残りの半分をなめるようにして味わい、日が落ちるほどに賑やかになってゆく店の中を眺めていればあつという間に過ぎて行った。

店内にいる客の半分ほどが入れ替わり、目が回るのではないかと思っほどにくるくるとフロアを走り回っているのは小間使いと言う

のがふさわしいような少年だった。店の中も外も賑やかさのピークに達しようとしているのが容易にわかったその時に、予想外にどうか案の定というか、店の隅から怒号が湧きあがった。

最初は火種のような言い合いが時折耳に届く程度で、おかみや周りの常連が冷やかし半分に諷めている程度だった。もちろんリバーにとっては、これが酒を飲む場所でのいつもの光景とでも言うように、視界の隅にもとどめてはいなかった。

ただ、それがいつもの酔った上での乱痴気騒ぎではないとわかった時には、すでに火種は導火線に引火し、あとは火薬に届くだけというところだった。

テーブルが蹴りあげられ、砕け散ったグラスの欠片に隣近所の客は転がるようにして逃げ出し、片方は右手に割れた瓶を左手にはナイフと呼ぶのが憚られるような長大なナイフが握られていた。そしてその対面、ナイフの男がテーブルを蹴りあげる間にもう一人の男は、どこからか取り出した散弾銃を相手の鼻つつらにつきつけていた。

絵にかいたような一色即発。

発狂した画家の手による一枚の絵のような光景で固まった光景に、誰もが言葉を失い、警察への通報を考えられたものなどもちろんだれ一人としていなかった。あの女将ですら仲裁するのを忘れて二人の一挙手一投足に見入っていたが、それでも手にしていたジョッキを的確に客に届けたのはさすがとしか言いようがなかった。

「てめえに何がわかる！」

随分と酒が入っているらしかったナイフの男は、呂律は怪しいながらもなんとかそう叫ぶ。ぶるぶると手元が震えているのは酒のせいか恐怖のせいかわからない。

「わかるからこうして話してやってんだろつが。その気もしらねえでてめえ勝手なことばっかぬかしやがって、もう我慢ならん！」

対してライフルの男ははっきりとした口調だったが、こちらも真っ赤になった顔と若干焦点の合わない視線が完璧に酔っぱらって

ることを教えている。

「んだとこの野郎、やんのか！」

「ぎげんなこのやろう！ てめえの脳グソぶちまけて犬の餌にするなんざ一瞬だぞこら！」

「おう、だつたら！」

一瞬だった。

ナイフの男がちらりと店内に視線を向け、散弾銃の男がそれに呼応するように引き金にかかる指先に力を込める。

「有り金全部だしな！」

ナイフと割れた瓶の切っ先が、一番近くで事態を傍観していた男の首元にそれぞれ突きつけられる。と同時に、ライフルの銃口があるうことか女将の眉間をしっかりとらえる。

「わるいな、いいもん見せてやった見物料だ。有り金全部置いてとつとと消えな。女将、お前は今ある売上全部だ！」

店内の空気が嵐のように全く違った方向に流れ、瞬き一つ許されないような緊張感が店の入り口までパンパンに膨れ上がる。

おそらく、ただの強盗程度ならここにいる連中はこの半分も驚かないだろう。その程度にはこの街は平和で、その程度には無法地帯だった。女将に至っては、笑っていなしてしまったかもしれない。それが、完全に自分たちには関係ないと高をくくり、安全圏にいると思いきや、思ってしまったところへの不意打ちだ。これほど意外で効果的な強盗手段も珍しいかもしれない。

かくして、悲鳴一つ上げずに男たちはナイフ一本と割れた瓶、そして一丁の散弾銃で店にいる全員をまんまと制御化においた、というわけだ。

ただし、

「女将、おかわり」

男たちの計画の範疇に入らないやつが一人だけいた。

リバーが空になったグラスを振り、あろうことか立ち上がり、自らカウンターに向かおうとさえしている。

「おい」

不機嫌そうにどすの利いた声で散弾銃の男がつぶやく。先ほどまでの激昂したような口ぶりは演技だったようで、その口調には今は酒の気配も感じなければ先ほどの軽薄そうな雰囲気はみじんもなかった。しかも、銃口はいまだしつかり女将に向けられたままだ。

全く聞こえないふりでリバーは店を横切り、カウンターに肘を置きながらグラスにビンの中身をあげる。トクトクというバーボンが流れる音までが店中に届き、あきらかにそれにいらついた散弾銃が再び、今度は先ほどよりも声を荒らげながら口を開く、

「てめえ！」

同時に銃口が女将から外され、向けられただけで気の小さい奴なら死にそうな勢いで照準がリバーをとらえる。

それが、男の見た最後の光景になった。

銃口を向けた先にはいるはずのリバーの姿はなく、代わりにどんな大きくなる琥珀色の塊。それがビンであり、琥珀色は中身の液体の色だということに気がついた時にはビンが男の顔面を直撃する、
がしゃんっ！

ドンッ！！

二つの音がほぼ同時に鳴り響き、一瞬にしてむせ返るような火薬の臭いと酒の臭いが店中に充満する。

「はい、よそ見しない」

次の音は声。

全員の意識が散弾銃の男に向けられた瞬きほどの間に、人の波を縫って走ったりバーが現れたのはナイフの男の懐數十センチのところ。ナイフと素手ではどちらが有利とも言えない極めて微妙な間合いだった。

ただし、それはどちらもが極限に集中をしていれば、という前提があつてこそその話であり、散弾銃の男がやられたことに動揺した状態ではどんな間合いも有利足りえなかった。

ナイフが翻った時にはリバーの無造作な蹴りが男の鳩尾に突き刺

さり、目を剥いたまま気絶した男は自分がぶちまけたガラス片の上にあっけなく崩れ落ちた。

時間にしてわずか三秒に満たない、まさに瞬間芸。

誰一人として動くどころか息をすることもできないような静寂の中で最初に動いたのはやはり、あの女将だった。

「すごいじゃないかあんだ！」

その一言をきっかけに店中から拍手と喝さいが沸き起こり、あつという間に店は元の活気を取り戻し、それどころかお祭りのような大騒ぎへと発展してしまふ。

隣にいるおっさん同士で抱き合うもの、誰のものともしれない酒を一気におおつて奇声を上げるもの、便乗しようとそれまで遠巻きに外から眺めているだけだったものまでが店になだれ込んできて、小間使いの少年はそれに次々と酒を売りまくっている。

リバーの周りにはあつという間に黒山の人だかりができ、やれこれを含めあれを食べとテーブルの上には山のような食い物と浴びてもなくならないほどの酒が用意されていた。

傍らには誰が縛り上げたのか、頑丈な麻のロープでこれでもかというほどにぐるぐる巻きにされた強盗二人組が粗大ごみのように店の隅に打ち捨てられている。

「あんだ、ただの配達屋じゃなかったんだね？　ありやなんだい？　本職は用心棒なんかじゃないのかい？」

礼だと言わんばかりに、先ほど出されたものよりもずっと透明度と粘度の高い酒を瓶ごと置いた女将が満面の笑みを浮かべてリバーの向かいに腰をおろした。少し上気したピンクの顔は恐怖の裏返しだろう。

「そんなもんじゃないよ。自分の身を自分で守って暮らしてきただけだ」

確かに用心棒を頼まれることも少なくはなかったし、一時期はそれを本職にしようと街に居つくことを考えたこともなかったわけではない。ただ、そうした商売の欠点は敵を作ることであり、それは

もちろん街に居つくこととは相反する道理ではない。結局最後に落ち着いた時は流れの配達屋を営みながら必要に応じて対象の護衛なんかもやる。

「黒髪のバイク乗りで凄腕の用心棒。これで赤い眼をしてりゃあ伝説のお尋ねものなんだがなあ」

「違うだろ、そりゃ壊し屋だろ」

「赤目の殺し屋なんてほんとにいんのか？ 賞金稼ぎにとっくに狩られたって話だろ？」

「そもそも実在すんのかよ？ ライフルの弾でも避けられるなんて、完璧なフカシだろ？」

先ほどまでの緊張の糸が溶けたのと一気に酒が回ったのとで次々に男たちの口から言葉があふれ出る。

曰く赤い目の悪魔。曰く人の形をした兵器。曰く史上最高額の賞金首。曰く人間大災害。

歩いた後にはぺんぺん草一本残らないといわれる伝説の破壊魔。そんなおとぎ話のような存在に話が及んだのは今日の恐怖をさっさと酒で洗い流すためだろう。

リバーはそんな話を聞くともなしに聞きながら、女将から出されたバーボンを流し込むと、先ほどのものよりもずっと強い熱気が喉を焼いたが、風味も味も先ほどのものとは比べ物にならないほどの上ものだった。

自分が話題の中心からそれたことにはほっとしたが、どうやらこの酒盛りは自分を放すつもりがないらしいことに気がついた時には、半ばあきらめ気味にボトルを半分ほど開けていた。

こうして、世界樹に愛でられた街の夜はいつもどおりに更けていった。

拾われ少女

覚醒した意識が最初に見たものは、窓からじつとこちらを見つめる二つの月だった。

まるで黒いキャンバスに描かれたかのように、窓のフレームにぴたりと収まった月は、互いに肩を寄せ合うように輪郭をにじませて触れ合わせていた。

輪郭がにじんでいるのは、寝起き直後の寝ぼけたピントのせいだとはわかったが、それにしても月がきれいだった。

青白い光を放ちながら双子のように寄り添っている月明かりが、記憶にある最後の景色よりも幾分か明るさを増しているように思えた。

「何時だ？」

部屋に備え付けの置時計を探すが、それよりも先に自分が腕時計をしたまま眠りについていたことに気付き、左手を引き寄せた。決して正確とは言い難いが、それでも大まかな時間を把握するには十分な、頑丈さを第一に作られた時計は、短信が三のあたりを指していた。長針を確認しなかつたのは、この時計の長身で分単位の間を確認する愚かさを知っているからだ。

「何だ、まだ寝れるじゃないか」

確か、あのどんちゃん騒ぎから解放されたのが日付が変わる直前だったはずだ。二人の強盗を引き取りに来たのと同じ警官があきれ顔で近所から苦情が来てるからさっさと帰れ、と言いに来たのはさすがにやりすぎだと思った。

特に起きる時間にあてがあるわけでもなかったが、少なくとも深夜三時は起きている理由のない時間ではあった。それはこの街に暮らす誰にとつても同じようで、眠りに落ちる直前まで祭りのように賑やかだった外の喧騒は、今では嘘のように静まり返っていた。

ぼりぼりと頭を掻きながらベッドに胡坐を掻いたりバーは、何を

言うでもなく窓の外にじつと目を凝らした。

昼間に見た、祭りのような活気あふれる彩り豊かな街並みはそこにはなく、四角く切り取られた町は全ての命が死に絶えたかのように色彩を失っていた。

いや、色彩はあった。ただそれは命を感じられる色ではない、と言すべきか。

死後の世界を絵に描く時に人はこういう色を使うだろうと思えるような、冷たくさびしい寒色だけに彩られた蒼白い街がそこにはあった。見ているだけで魂が凍るような寂しさ。

一人で旅をする者であれば絶えず隣り合わせの、孤独のイメージ。それは、取りも直さず、

死

一歩足を踏み外せば常に人の隣人であり、しかし絶対的な距離を持って存在しているそれは冷たく、時には甘美に、ときには容赦なく、いざないの手を差し伸べる。

その身近さと絶対性を併せ持ったそれが、四角く区切られた窓の中に満ちている。数え切れないそれを見てきたリバーには、それが物理的にそこに存在しているように見て取れた。

「賑やかだったぶん、こういう反動がでっかいのはやっぱり好きになれねえな」

ゆっくりと立ち上がって窓枠に手をかけ、一枚の絵のように月が照らす景色の中上半身を覗きこませる。と、そこには吸い込まれそうな静けさと、凍りつくような明るさがあった。

一度だけベッドを振り返るが、真冬の寒さの中ならまだしも、中途半端に覚醒してしまった今は毛布のぬくもりはさほどの魅力を持つてはいなかった。

「ちよつと散歩して、んで寝るか」

きつとこのままベッドに戻っても眠れなくはないだろう。ただ、それまでに布団の中でしばらくもんもんと寝がえりを繰り返すことになるだろう。

それならば、というわけだ。それに、この時間の街というのは得てして水面下での活動が盛んであったりする。それは単純に深夜営業の何某かの店があるという意味でもあるが、むしろリバーの想定しているそれは昼間の世界からつまはじきにされた者たちの活動の場、という意味合いが色濃い。そういう輩の商売は、危険が伴う反面実入りもケタが違う。

ブーツのひもを締めなおし、窓枠に足をかけたかと思うとチラッとだけ眼下の地面を確認して体を宙に踊らせる。

軽業師のようにすらりと伸ばされた両腕でバランスをとり、舗装されていない道路に靴底がつく直前でゆっくりと膝を曲げて着地の衝撃を軽減する。かすかに砂利を踏む音だけが夜の通りに幾重にも残響を残したが、その音も夜色の布に吸い込まれるようにして溶けて消える。

外に出てみてわかるのだが、この街は世界樹がある割には街灯が少なく、月明かりと窓からこぼれるわずかばかりの明かり以外には世界樹の実が放つ赤だけが夜空に色を持っている。

この街は世界樹の利益を誰かが独占しているわけではないという果物屋の小僧の言葉を思い出す。おそらくは街灯一つにとっても共有の財産である世界樹のエネルギーを使うことを節約しているということなのだろう。となれば、ますます世界樹を街全体で共有している世にも珍しい構図が真実味を帯びてくる。

「とはいえ」

おかげで昼間と印象の違いすぎる街を、昼間の記憶を頼りにゆっくりと闊歩する。

「もうちょっと明るくてもいいと思うんだがなあ」

わざわざ聞こえるようにそう言うと、さらに歩調を落として通りの真ん中を歩く。さすがにこの時間では車も馬車も通りはしないが、ど真ん中を歩く理由は他にあった。

三人

窓から飛び降りて五十メートルと歩かないうちに物陰からこちら

を見る視線の数がその人数を教えている。

光が大きければそれだけ生まれる影も大きさを増す。昼に対して夜があるように、活気あふれる昼の対極に位置するのはその歪みに身を落としたもののなれの果てなのかもしれない。

ただ不思議なことに、こちらに向けられる三組六本の視線以外にも奇妙な感覚がある。

（まるで街全体が蜘蛛の巣みたいだな。とはいえ、何だこりゃ？）
とりあえずやることは一つだった。それまでと全く同じ歩調で通りを歩き、辻に差し掛かったところでくると向きを変えて右に折れる。ここで重要なのは、いかにそのあともまっすぐ歩いて行つたと相手に思わせられるか、だ。

果たして作戦は成功したようで、角を曲がってすぐのところにある看板に身を隠していると、にわかにはこちらを追う足が速まったのがわかった。数は二つ、おそらく最後の一人は警戒して後ろから様子を見ているのだろう。それなりには連携の取れた連中のようにだった。

（でも、素人なんだよな）

一つの足音が角に差し掛かったところでゆっくりと首から上だけを覗かせ、

「はい、いらつしやい」

先手必勝を絵にかいたような一撃。ひよっこりと覗いた顔を思い切り右手で鷲掴みにし、そのまま地面にたたきつける。幸いにも足元は未舗装の砂利道ではあったが、頭の形に地面がへこむほどたたきつけられてはそれも関係なかったのかもしれない。

本人は用心していたつもりかもしれないが、あれだけしつかりと壁から顔をのぞかせていては狙ってくれと言っているようなものではない。たぶん、男は何をされたのか気がつかない間に意識が途切れたことだろう。

二人目に関しては不意打ちを食らったことには気がついたようだったが、それでも反応の隙は与えなかった。目の前で一人目が通り

の向こうに引きずり込まれるように消えたのを見てその場にとどまったままでは良かったが、陰から飛び出してきたリバーの速度には全く反応できなかったようで、頬に手のひらを叩きつけられ、そのままコンクリートの壁に反対側の頬を叩きつけられ、これも瞬きほどの間に意識が途切れる。

「ってわけだ。悪いけど、こっちもおいそれと財布の中身くれてやるわけにはいかなくてさ」

叫ぶわけではなかったが、今の一連の出来事が確認できるほどの距離にいるなら聞こえるだろうという声で言う。

「てめえ、邪魔すんのか？」

三人目が姿を現したのは、意外なほどに近くの路地からだった。もう少し離れていたかと思っただが、どうやら思っていたよりはできる手合いらしい。

「じゃま？ こっちの散歩の邪魔してきたのはそっちだろ？」

「は？」

「ん？」

話がかみ合わない。こちらが何か見当違いをしているのではないかと、窓から飛び降りるところから今までの記憶を脳内で再生してみるが、やはりそれらしい個所は見当たらない。

「お前、俺達の邪魔をしにきたんじゃないのか？」

「あんたらが何してるかも知らないのに邪魔もへったくれもないだろ」

「じゃあ何で？」

何となく言いたいことはわかる。

「そりゃ、こんな夜道でこっさり後ろをつけれりゃ、誰だって警戒するだろ。それこそ、俺みたいな流れものなんか殺されたって誰もかばっちゃくれないからな。自分の身は自分で守る」

正論か否かは別として、リバーの身に付けた見知らぬ街での護身術だ。結局は、自分を守るのは自分しかいない。ただでさえ食いぶちを奪い合うようにして生きている世界で、よそ者と言うのはそ

れだけで理不尽な扱いを受けるものだ。

「ちっ」

男は露骨に舌打ちをすると、忌々しそうに回れ右をして歩き出す。捨て台詞の一つも残していかとも思ったが、何も言わずに消えるあたり潔さは身につけているらしかった。

視線だけで眠っている男二人を、最後にもう一度だけ歩き去った男の姿が見えなくなったことを確認し、

「これでいいかい？」

先ほど自分が曲がったほうとは反対側の通り、リバーから見て右側の通りに体を向けおどけたような口調で言い放つ。相変わらず街灯が少ないため、通りを曲がって三軒向こうはもう闇に吞まれかけているような有様だ。

「どうして？」

闇が口を利いた。

ぼんやりと、淡い照明の中に浮かび上がるように人のシルエットが切り取られ、遠近法を無視したように両足が動く。

「あなたも、あいつらと同じ？」

ギリギリでシルエットが見える距離。おそらくは向こうから見てもリバーがギリギリ確認できる距離、ということなのだろうか、立ち止まった影は驚くほど淡々とした口調で言葉を紡いでいる。

それが、今しがたまで男に追われていた少女のものとは思えないほどに。

「だったら、さっさと逃げたほうがいいんじゃないのか？」

何がどう同じなのかを聞くようなことはしなかった。少女は、女というにはまだ少し時間を必要としそうな、女らしさよりもあどけなさのほうが目を引きくような姿を月明かりの下に晒す。斜めに切り取られた陰から姿を現した少女の姿に、リバーは息をのむ。

踏み出した足音が、水面に生まれた波紋のように周囲の空気を乱し、次の瞬間に引き締める。

「そうしたいけれど、もう」

綺麗な娘だ、そう思ったのは流れる髪を見たからで、顔立ちに關しては表現する術をリバーは持ち合わせなかった。まるで計算つくされた造形物を見せられているような、現実味を帯びないほどの美しさは、後から思い返せばあの夜の月明かりにいくらかは割り増しされていたのかもしれない。それを差し引いたとしても掛け値なしに綺麗な少女。それが重力に引かれるようにその場に崩れ落ち、

「こら！ おい！」

限界だったらしい。

あわてて飛びつくようにして少女の肩を支えようとするがあまりにも細いその肩をわしづかみにするかどうかで迷った。その一瞬に少女の赤みを帯びた亜麻色の髪が流れ落ちてゆく。

「くそっ！」

滑り込みセーフで、自分の体を下敷きにして少女を支えると、一張羅のジーンズ越しに尻に砂利の感触が突き刺さる。たぶん破れてはいないはずだが、もしかしたらちよつとぐらいは擦り傷ができているかもしれない。

少女の体が鳥の羽のように軽い、などという妄想を抱くほどには子供ではないつもりだったが、あまりにも重量を感じさせない少女の体がどれほど華奢であるかは想像の範疇を超えていた。その程度にはまだ女を知らない。

「ちゃんと食ってんのか？」

気を失った少女の口元から一筋の血が、糸を引くように滴り落ちる。男らに追われている間もずっと歯を食いしばって逃げていたのだろうか。そう思うと、この年の少女にはどれほどの恐怖だったかは想像もしたくない。怒りよりも自分が男であることへの情けなさのほうがかみ上げてくるような気がして、リバーはふとそんなことを口走ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9839x/>

リバー・デリバー

2011年10月28日14時04分発行